# 甲状腺癌の自然史から見た過剰診断の発生メカニズム

若年者の甲状腺癌は転移・再発が多いが予後は極端に良くその原因は長らく謎とされてきたが、近年の臨床的エビデンスの蓄積からその謎の一端がわかってきた。

微小乳頭癌の経過観察のデータ等から、微小乳頭癌は３０代以降の成人では高頻度で存在し、中年以降はほとんど成長せず逆に相当数が縮小することがわかった。また、微小乳頭癌が癌死を引き起こしたり、未分化転化するという従来信じられてきた仮説には否定的なエビデンスが出ている。福島県での若年者の甲状腺癌の大規模スクリーニングの結果から、超音波でしかみつからない甲状腺癌は１０代以降その頻度を急速に高め、これらの癌はサイズの大きいものほど成長が遅くなることから将来的には成長を止めることが推測される。

これらのエビデンスから甲状腺癌の自然史について以下の通りであることが考えられる。甲状腺癌の大部分は年少期に発生し、１０－２０代で急速に増大し、転移・浸潤をきたす。これらのごく一部は若年期に治療を要するサイズまで増大するが、残りの大部分は成長期を終えると増殖を止め微小癌の状態で一生とどまる。中高年で発生する癌死につながる甲状腺癌はこれらとは基本的に発生母地が別である。

我々はこのような若年者に発生する癌を従来の甲状腺癌と区別して若年型甲状腺癌（Juvenile Thyroid Cancer）と名付け、また Self-limiting Cancer（SLC,自己限定的な癌）と呼んでいる。SLC は従来の中高年で見られる甲状腺癌と同じように転移・浸潤はするが成長に限りがあるので患者を滅多に殺さない。SLC の早すぎる診断は患者に過剰診断の被害をもたらす半面、生存率や QOL の向上に役立たない。またその初期の成長過程にある時にサイズが小さいからと言って縮小手術をしてしまうと再発率の上昇につながってしまう。

従来、“がん”という病気に対しては早期診断・早期治療が金科玉条のように言われてきたが、甲状腺癌で初めてその詳細が明らかになった SLC の存在はその常識を覆した。“早すぎる診断”が対象者に害を与えるがんがあることを十分認識して診療しなければならない時代がやってきたのである。

（文献）Takano T. JAYAO 9:286-288, 2020.
Overdiagnosis of juvenile thyroid cancer: Time to consider self-limiting cancer.